

知求会ニュース

2005年06月

第14号

◎ 入学おめでとう！

4月8日（金）午後1時半から、栃木県総合文化センターにて入学式が挙行されました。今年度の入学者は、国際社会研究専攻第7期生が16名（内留学生5名）、国際文化研究専攻第7期生が8名（内留学生4名）、国際交流研究専攻第2期生が11名（内留学生7名）の合計35名（内留学生16名）が入学されました。4月12日（火）午後3時からオリエンテーションが開催され、大学院同窓会も最後に時間をいただき、新入生から大学院同窓会の名簿記入をお願いしました。

◎ 進学おめでとうございます！

昨年秋に修了された、4期生のグエン テー キム フォン(国際社会研究専攻)さんが、この春作新学院大学大学院 博士(後期)課程 経営学研究科経営学専攻に進学されました。今後の研究成果が期待されます。現在、博士課程進学者は累計14名です。現在、大学院同窓会では、修了後の動向を正確に把握しきれていませんので、情報をご存知の方は連絡して下さい。

◎ 今年度修士論文中間発表会日程決定

6月15日（水）に、恒例の修士論文中間発表会が開催されます。今年度は、国際交流研究専攻第1期生の初めての発表になります。詳細は、後日お知らせします。

◎ 友松篤信教授と国際学部学生・院生の共同執筆による刊行

友松篤信教授が国際学部学生と大学院生の総勢48名により、「**国際開発ハンドブッカー NGOのフィールドメソッド**」を明石書店から4月27日に刊行されました。この本は、素人の学生がプロ向けの専門書を書いたという、日本の大学の歴史にないユニークな本です。この本はNGO活動の方法論を、国際開発の「普遍的な方法」、すなわちフィールドメソッドとして抽出することを意図して刊行されました。本の構成は、序文、第一部フィールドメソッドの理論、第二部フィールドメソッドの実際、第三部フィールドメソッド研究の実際、資料、索引、編著者紹介などの352頁になっています。調査対象は、戦後復興・児童福祉・農村開発・保健医療・所得向上・教育開発・環境保全・自立支援の8分野で、対象国は延べ47カ国、対象団体は延べ60団体です。この本の特徴は、「NGO活動ハンドブック」、「開発教育のテキスト」、「豊富な写真による視覚的編集」の三点になっています。またこの本の価格は2800円（税別）です。ぜひ、国際開発・国際協力に興味のある方は一読していただければ幸いです。今後の展望として、継続的に調査結果などのデータを蓄積し改訂版を刊行する体制を整えていただければと思います。

◎ 掲載記事紹介

新年度より、宇都宮大学広報室が発行していた「UU now」と「学園だより」が一本化され、「UU now」リニューアル創刊号が発行されました。タブロイド判のフリーペーパーで、2万部発行しています。編集には、教職員と学生が一体となって関わりました。創刊号の特集は「学長解体」として、田原博人学長の実態記事が紹介されました。同窓会の立場から、大学のHPに発行と同時に掲載して、ぜひOB・OGに広報が行き届くようにしていただければと思います。情報は新鮮さが大事で、時間が勝負です。

◎ 国際学部だより

「UU now リニューアル創刊号」の4頁に「ベストティーチャーに聞く I」の記事が掲載されました。その内容は、「平成16年度ベストティーチャー」として、上位5名のうち、国際社会学科 田巻松雄教授と国際文化学科 デロージェー・ロリ・アン外国人教師の両先生が選出され、「ベストティーチャー賞」を授与されたことによるインタビュー記事です。

研究室訪問 06 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第6回目には、3月末日に定年退官された国際社会交流研究講座所属の藤田和子先生にお願いしました。

東アジア共同体の実現を希求して

—東遊運動100年の節目に—

藤田 和子

東南アジア諸国連合 (ASEAN) は2004年11月ラオスの首都ビエンチャンにおける首脳会議で、政治・安全保障、経済、社会・文化の3分野で域内安全保障、域内経済協力、周辺国との自由貿易協定 (FTA) など重要問題に関わる加盟国間の方針の統一をはかった。ヨーロッパ連合 (EU) に次ぐ共同体の早期実現をめざす努力の一環である。

今回とくに注目されたのは、ASEAN 首脳会議にあわせて1997年から毎年開催されている ASEAN10 プラス3 (日本・韓国・中国) 首脳会議を「東アジア共同体 (EAC)」の創設に向けた「東アジア首脳会議」に移行させられるか否かであった。「東アジア共同体 (EAC)」の創設は、すでに2003年インドネシア・バリ首脳会議で合意済みの課題であるが、域外3国の思惑は言うまでもなく、ASEAN 自体も域内に先発・後発経済間の格差やインドネシアの主導権争いなど微妙な舵取りを迫られる問題を抱えている。2004年にマレーシアの首都クアラルンプールで「東アジア首脳会議」を発足させることは、難しいのではないかと会議開始時には観測されていたが、一転して合意が成立した。

北東アジアと東南アジアを包含する東アジアに新秩序を建設する上でASEANが先駆的、先導的な役割をはたしていることは、北東アジアにとってもきわめて重要な与件となっている。日本を含む北東アジアに冷戦構造が根強く残り、低水準の地域連携すら至難とされ

るのに対し、東南アジアは冷戦下の熱い戦争、ベトナム戦争中の 1967 年に結成された親米諸国連合 ASEAN を、冷戦終結後「リージョナル」な地域連携・協力機構として発展させることに成功したからである。

ベトナム戦争時を想起してみよう。当時、タイは韓国・オーストラリア・ニュージーランドとともに南ベトナムに派兵、タイ・フィリピンの米軍基地は在日米軍基地とともに南北ベトナムへの爆撃拠点、出撃拠点として機能していた。米軍の直接介入期、最高時 54 万を数えた南ベトナム駐留米軍と 100 万のベトナム共和国（南ベトナム）軍に対し、南下したベトナム民主共和国（北ベトナム）軍と南ベトナム解放民族戦線の武装諸勢力は 25~30 万。中国は延べ 32 万以上の人民解放軍を「後勤部隊」として北ベトナムに派兵、約 6000 のソ連軍とともにこれを支援した。一方、親米諸国に対しては、ロスト理論に基づく米国援助の大量供与と米系企業の進出が相次ぎ、今日のシンガポールの新興工業国・高所得国入り、マレーシア・タイの中進国入りの基礎が築かれたのであった。欧米諸国による植民地化の過程で分断された東南アジアは、第二次世界大戦期の日本侵攻・日本軍政を経た脱植民地化の過程で、冷戦下真二つに分かれて対峙したのである。

その東南アジアが北東アジアを含む東アジアや、大洋州から南アジアを含むさらに広域なアジア共同体の実現に向けて主導的な役割をはたしている。理由として、以下の 2 点を特記しておく。

- ① ASEAN 諸国が域外に対し極めて開放度の高い経済運営を行い、域外からの貿易と投資の累積を通じて高成長を図るといふ開発路線を各国それぞれの歴史的経緯の中で選択してきたこと
- ② その結果、各国内あるいは加盟国間の格差・不均等や権威主義など種々の問題をはらみながらも、生産・金融面で急速に進行する資本のグローバル化を受容する中で域外、特に北東アジア諸国との相互依存関係が強化され、実態としての経済圏が形成されつつあること

あわせて、市場経済化、グローバル化の進展が、多様な文化を内包する東南アジアに同一の価値観を植えつけ、若い世代を中心に地域への帰属意識を育んできたことも指摘したい。

以上の要因は、同時に、東南アジアに限定しない共同体の設置が、東南アジアにとっても重要であることを意味している。ASEAN が日本・韓国・中国を含む「東アジア共同体」の提唱に進まねばならない具体的な背景がある。なかでも日本と中国はこの地域の国々にとって巨大な存在である。東南アジアを過去に一つに結びつけたものは何か、と問われたとき研究者は①第 2 次世界大戦中の日本侵攻・日本軍政 ②中国の冊封体制をあげる。しかも、この両者は、日本の経済的プレゼンスと各国内の華人・華僑という現実の問題につながっている。日中は、「東アジア共同体」がかつての大東亜共栄圏や冊封体制の復活に終わらないよう格段の努力をすべきであると考えられる。

特に、日本の責任は重大である。東南アジアを含む東アジアの人びとにとって、「分断と戦争の 20 世紀」が「和解と協力の 21 世紀」になるかどうかは、経済力もまだ小さな東南

アジア 10 カ国の提唱に、日本がどのように応えていくかにかかっているとんでも過言ではない。実際に 1990 年代初頭、マレーシアのマハティール首相が提案した EAEG、EAEC 構想を日本はアメリカの意向を忖度して潰した。

東南アジア研究者から見ると、2005 年は、フランスの植民地となったベトナムへの支援を求めてファン・ボイ・チャウ（潘佩珠）が渡日し、ドンズー（東遊）と呼ばれる日本への留学運動を組織した年から 100 年の節目にあたる。1907 年、日仏協約を締結した日本は 1000 人を超すベトナム人留学生を追放した。今回も、「東アジア共同体」とアメリカの位置づけ、オーストラリアやニュージーランドとの関係が議題に上ったときに、日本はどのように動くのであろうか。しかし、対中貿易が対米貿易を上回るなど、モノの動きだけをとっても、この地域の状況は急激に変貌している。ともに協力して新しい地域を創生するしかない。この点で政府や企業にとどまらず市民レベルの自覚に期待したい。

知究人 04 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー（[ちきゅうびと](#)）を設けました。第 13 号の第 4 回目は、国際学部 1 期生の志村なぎささんです。

「留学という一手段」

筑波大学大学院博士課程

人文社会科学研究科国際政治経済学専攻

志村 なぎさ

「志村さん、昨今の流行りもあって外国に留学する人はたくさんいます。しかし、その中で成功したといえる人は多分一割にも満たないでしょう。少々現地語に通ずるようになった。現地の友達ができた。地理に詳しくなった。その程度で満足してしまう人のなんと多いことか。外国に行くことが目的なのではありません。行って来ただけでは意味はないのです。志村さんはこれから研究者になろうとしているわけですが、何のために二十代の貴重な時間を使って外国に行くのか、常に考えながら留学生活を楽しんでください。」

2002 年 8 月、まさにこれから日本を離れようとしていた私に指導教官が送ってくれた彼一流の訓示と激励の言葉である。その年の 3 月に修士課程を終え、博士課程への進学前に語学の習得を含め現地での予備調査をするために旧ユーゴスラビアの首都、現在はセルビア共和国の首都であるベオグラードに発つところだった。

旧ユーゴスラビア。かつて「バルカンの火薬庫」といわれたこの地と私との出会いは 1992 年の民族間紛争にさかのぼる。隣人同士の殺し合いがなぜ起こったのか。その理由が知りたくて勉強を始めた。現在は旧ユーゴスラビアの構成共和国のひとつであったセルビア共和国における住民自治について研究している。

生涯の仕事として研究者の道を選んだときから、現地への長期留学は考えていた。そのタイミングがちょうど修士課程修了後だったわけだが、それから2年、私はできるかぎり楽しんで勉強し、生活した。復活祭の夜、5時間経ちっぱなしで続くミサに参加したり、バスケットのセミプロチームに混ざって練習したり、世界遺産の教会を見に行くためにヒッチハイクもした。先入観を捨て、アンテナを高くし、人に会い、彼らの文化を学んだ。なぜここにいるのか。日本から遠く離れたセルビアで私は何をしようとしているのか。師の言葉を胸に走った2年間は本当にあっという間であった。

留学は目的ではない。手段である。異なる言語を学び、異文化に触れ、異なる価値観を知ることには何の意味があるのか。その答えがあつてこそ生きてくる手段である。

さて、私の留學生活は果たして師の言う「一割」に当てはまるものだったのだろうか。その答えはおのずと私の博士論文、ひいてはこれからの研究に現れるだろう。

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2005年の水無月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。)今回、第14号に寄稿をお願いしていた、今井研究室 OG・大井咲子さんから入稿がありませんので、次号以降に掲載を見送ります。

◎ 課外活動共用施設事業資金募金状況経過報告

3月末に大学から發送された募金状況は、大学のホームページに詳細が公開されています。[\(http://www.utsunomiya-u.ac.jp/bokin/\)](http://www.utsunomiya-u.ac.jp/bokin/) 同窓会の募金状況は、国際学部 21件 128,000円の**2.4%**、教育学部 102件 1,113,000円の**11.7%**、工学部 129件 1,071,000円の**14.9%**、農学部 617件 6,676,000円の**71%**です。国際学部等同窓会の歴史の浅さを露呈した結果と共に、農学部同窓会の組織力と同窓生の母校愛が顕著に現れた結果ではないでしょうか。

◎ 訂正

前号の記事を一部訂正します。**進学おめでとうございます!**

張潤[女主](チャン・ユンジュ)(国際文化研究専攻・5期生)さんが、東北大学大学院 環境科学研究科 博士課程後期 **国際環境・地域環境学講座 朝鮮民族文化研究専攻**に進学されました。(訂正前 東北アジア地域文化論専攻)

編集後記: 限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか?ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い**: **住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** global@minakuru.net